

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

残酷平和論



- 第1章 戦争が始まる原因と背景
- 第2章 平和のもろさと共生の模索
- 第3章 遺伝子と文化・文明の関係
- 第4章 コミュニケーションとは何か
- 第5章 マスコミの存在理由とは
- 第6章 人は死刑判決を下せるのか
- 第7章 憲法九条の理念と機能

著者 鴨志田恵一

版元 三五館

価格 1,400円(税抜)

1. 口上

海外ですぐれた日本人に出会うことが多い。すぐれた人物だから海外に雄飛(いやはやなんと古臭い表現だ!)しているのか、あるいは異なる世界に身をおくことで、自ずと才能が目覚めたのか、どちらかは判らない。そのようなことを突き詰める癖は持ち合わせないので、だいたいニワトリと卵の関係なのだろうと整理して、次に進むことにしている。

もちろん「日本人として」優れているとか、ましてや「日本人にしては」優れているということではない。この手の考え方の不毛さは、異境に立ってみて初めて実感できることなのだ。ニューデリーの空港に降り立って「日本人にしては英語ばうまかけん。」などと威張ってみてもどうなるものでもない。

逆に「日本語のわかる奴は居ないのか?なんて国だ」と怒ってみても、疲れるだけで、なにも得るものはない。相手がナ二人でもいいしカニ語でも良い、身振り手振りを駆使しても、とにかく自分の意志を通じさせることが第一なのだ。そうでないとトイレにも行けないし、タクシーにも乗れない。

自分をグローバルな座標上に、一人の人間として置いてみることだと思う。ここで話はそれる。グローバルと言った場合世界地図が頭に浮かぶ。別にそれが悪いと言うわけではないし、私だってそうなのだが、友人に言わせると、グローブ (globe) とは地球の意味なので、世界地図というよりはむしろ地球儀を思い浮かべるべきらしい。

「なんだそりゃ、ただの言葉の遊びだろ」と思った。こういった屁理屈を排除するには

しゅからしかあっ!

という呪文を浴びせかければよい。九州人なら大概このぐらいの技は持っている。ところが、この屁理屈には奇妙なことに視覚的な説得力

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

があったようで、私の眼前にありありと地球が浮かんできてしまった。
アポロ 11 号が月面から見た青い地球の姿が。

そこには国境もなく、戦争も貧困も見えなかった。宇宙の奇跡として水をたたえた青い惑星が、漆黒の宇宙に静的に浮遊していた。グローバルな感覚とは本当はそういうことなのかもしれない。

日本に帰って、はじめて私の身に起こったことと言えば、税金の納付書が送られてきたことを除けば、ストレスがたまったことだった。かの「呪文」が口癖になりそうだった。そんな日々の中で、いく人かの優れた方々と旧交を温めさせていただく機会を得た。海外で出会った方も居るし、日本で知りあえた方も居る。そういった方々を積極的に紹介してゆこうと思うに至った。

「本当は優れた人がたくさん居て」、「まだまだ捨てたもんじゃない日本」なんだから「みんなビシッとやろうぜい」とエールを送ることにしました。私のストレスが減ることを期待して。

第 1 回は鴨志田恵一さんを紹介させていただきます。そんな勝手な思いつきに「いいとも」と快く応じてくださった氏にあらためて感謝を申しあげます。

2. 研二の献辞

人との出会いは、全く本人の意思とは関係なく起こる。このことを私は拙著「異境」でも述べたように、仏教用語の因縁の一環として理解するようになった。私と鴨志田氏との出会いもそうであった。それには、わたしたち二人の出会いを仲介してくれた、小指敦子女史という偉大なファッション・ジャーナリストが存在していたのだが、私と彼女の出会いも全く突然のものであった。

詳しい話はここでは省くが、この女性を知ったのは、私の初めての東京での実に小さな個展の時で、今にして思えば、私のあの当時の稚拙な作品を買ってくれた最初の見ず知らずの人であり、それ以後彼女が亡くなるまでの十数年余り、タンカで私が一人前になるのを様々な形で援助してくれた大恩人である。彼女は 1989 年に六十歳の若さで他界されたが、その彼女と最後に会ったのも東京での展覧会の時であった。その時に鴨志田氏を紹介され、三人で一緒に晩餐となった。文字通りの最後の晩餐であった。

その日、展覧会場に小指女史より一足速く現れた鴨志田氏は非常に礼儀正しく、私がそれまでに会ったことがあるジャーナリストとは一線を違えた人物との印象がある。聞くところによると、剣道を嗜まれているとのこと、成程と思った。それどころか最近の氏の話しによれば、どうやら彼の人生は剣道に収束されつつあるらしい。ちなみに氏は糖尿病を患いながらも、それを克己し現役の剣士として朝稽古を欠かし

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

たことがないという。

この三人での出会いの直後、小指女史は急逝されたのだが今にして思えば、彼女はその役割を鴨志田氏に託し、安心して逝かれたのだろう。鴨志田氏はこの出会いについて別稿で次のように記している。

『私はさして曼荼羅絵に関心があったわけではないが、東京での個展で3人が顔を合わせる時が来た。K女史は私とB氏を引き合わせるや、1年後に急死した。あたかもK女史はわれわれ見知らぬ男同士を引き合わせて死に急いだようで、残された2人はポカンとした気分だった。2度目の2人の出会いは焼香に訪れたご自宅でのことだった。』

私共二人の会話とは、ほとんどが彼が私に教えを垂れているという程のもので、真剣さと笑いを織り交ぜながら、彼独自の哲学論から、果ては人としての処世術まで実に広範囲なもので、インドの山奥で一人絵を描いている私にとっては、誠に有意義な頭脳の刺激を受けていた。

人間の仕事は多種多様である。しかし、何をやるにしろ、その精神的な側面の影響は、その仕事に大きな影を落とす。私が仕事としているタンカという仏教芸術では尚更である。私のこれまでの人生には、因縁で結ばれた数人との素晴らしい出会いがあった。彼等にはいづれも精神面、物質面両方の恩恵をこうむっている。私が今あるのも、彼

等のお蔭で、鴨志田氏もそのうちの一人である。「残酷平和論」、この本を読みながら、これまで氏が私に語ってくれた色々な話が、あの時の臨場感をもって彷彿としてくる。鴨志田氏のように、本質的な意味での人間存在に深い洞察をもつことに興味がある方々には、是非とも御一読をお勧めする名著である。

2011年7月

佐世保にて
馬場崎研二

3. 浮世の書評

「戦争は最大の人災である。」という著者の認識は表現を変え繰り返され、視点を変え検証されてゆく。優れたジャーナリストとしての直感と経験則が公理を導き出してゆく。あたかもアインシュタインが光の速度を不変としたように。本来なら公理公準とは証明を必要とはしないものだが、著者は執拗に証明を求め、思考が展開されて行く。

○第1章「戦争が始まる原因と背景、構図」

○第2章「平和のよろさと共生の模索」

○第3章「遺伝子と文化・文明の関係」

通常のパラダイム入門書では国家間の利害対立に還元してしまうような。社会学入門書であれば、内在する対立要因による軋轢といった「時代おくれの弁証法」に問題を委ねてしまうような。そんな主題を「国

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

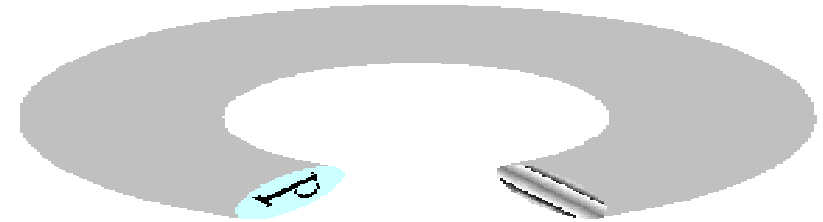
家があるとするなら国民に」「社会があるとするなら生活に」、目線をあてて思考を深めて行く。文明・文化・宗教はもとより、遺伝子にまでおよぶ分析の緻密さは驚嘆に値する。

事実をして語らしむ。事実は取材により獲得する。一流のジャーナリストであれば基本をないがしろにしない。とはいえ幾重にも張り巡らされた隠蔽のカーテン、事実を歪曲し、歴史をも書き換えようとする企てを見破るには、緻密な分析だけでは心もとない。表層の微細な歪み、些細な論理の破綻、そういったわずかな手がかりから現象の奥にある本質を見通す力が必要とされる。多彩な発想、複眼的な視点、たまには飛躍する想像力、判じ物を読み解く粋な心、等々ありとあらゆる感性をとぎすまし、世界と対峙している超一流の人物が鴨志田恵一である。



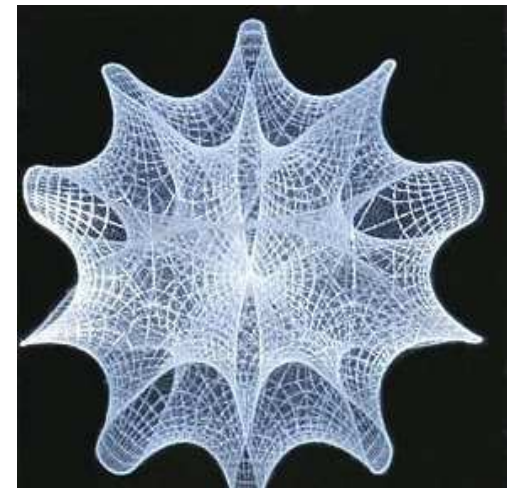
さて、著者は世界をコインにたとえている。片面は平和(Peace)である。どちらに転ぶか、コインは危うい均衡を保ちながら立っている。円筒状に引き伸ばされ、「とりあえずの危機を回避した」との報道に一息つく。日本ではそのような認識のまま、半世紀以上を過ごしているのかもしれない。円筒がひん曲がって、もう一方の面が迫っている可能

性もあるというのに。



世界は欠けたり、よじれたドーナツがからみあっているのかもしれない。そうだとするとまだまだ単純なモデルと言えるだろう。スパゲッティを想像することまでは容易にできるはずだから。

最先端の量子物理学のひとつスーパーstring理論では、世界は11次元で記述される。右はカラビ・ヤウ多様体と呼ばれる6次元立体のモデルである。世界は4次元時空の各点にこのような多次元体を内包しているという。



これだって

4+6=10! 1枚たいな〜い。

それどころではない。どれがPでどれが反対面なのか、いやはや。

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

○第4章「コミュニケーションとはなにか」

インターネット、ブログ、SNS といった現代のツールまで含めたコミュニケーションを論じる。一人一人が世界の構成者であること。一人一人が情報の発信者であること。これを自明の理として、コミュニケーションの謎を解明してゆく。

池澤夏樹を引用し、第5章に先んじて、不注意な読者(学生)を陥れるための丁寧な伏線も用意されている。曰く『森林から草原に、おずおず出て直立した時以来、我々は不器用なコミュニケーションで互いの気持ちを確認し、グループを作り生き延びてきた。やがて言葉というものを得て、ヒトは地上の最強の種として躍進した。ケータイはその延長上にある。』

○第5章「マスコミの存在理由とは」

ここでリズムが変わる。「序破急」でたとえば急展開といったところか。サッカーであれば前線からプレスをかけ、前懸かりに攻めてゆく勢いである。豊富な経験と事実から世界モデルを定義し、トップスピードで論考を重ねて行く。あたかも数理科学者が公理と計算により世界を予測し、物理学者が実験によりそれを証明していくように。

ただし、読者も素人ばかりではない。残ページを見て、いよいよ中入り後の盛り上がり到来を予感することになる。ミステリーなら本筋は

未だ尻尾をあらわしてはいない。いかにもそれらしい容疑者が逮捕され自白を強要されている場合だろう。「なんだ、まだ半分だよ。」授業が中休みするこの機をとらえて熟達の剣士、鴨志田恵一は巧妙に技を仕掛ける。

「ジャーナリストは時代の流れとともに、どんどん世代交代しないと、その時代の真実の発見者が枯渇します。」の言葉を残して、著者は突然この章を締めくくる。数百人という学生、数万単位におよぶであろう読者、いうまでもなくマスである。そのマスに向けて鴨志田恵一の決め技が炸裂した瞬間である。突然の締めくくりにエスケープもままならない学生は、ポケットの中のケータイが存在感を増していることに気づければ幸いだ。コミュニケーション・ツール(もちろん言葉はもとより)を持つ者は、責任を持って世界に関わらねばならないという現実を認識するための希少な瞬間が現出したのだ。

○第6章「死刑」

○第7章「憲法九条」

この2章がメインイベントとして残されている。さらに緻密な論考が重ねられる。ただし著者は結論を急ごうとはしない。これこそが一人一人に託されたテーマである。

もしかして本書の題名はここから来たのかもしれない。著者は語る「残酷なようだが、模範解答はない。ぜひ時代の真実を一人一人が発

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

見して欲しい。」小さなつぶやきが聞こえるようだ「ケータイ持ってんなら、できるはずだ。自分は数十年前「化石特派員」の時代にロコミと電報、現地の人々との信頼だけを頼りに、戦地を駆けずりまわったんだから。」

希望を託すにたる若者達が居るとは、なんという幸せなのだろうか。

鴨志田恵一（かもしだ・けいいち）

1943 年生まれ・ジャーナリスト

日比谷高校から東京大学を経て

1966 年に朝日新聞社に入社

外報部に長く、カイロ支局長やパリ支局長を歴任

アラファト議長やゴルバチョフ首相と交点を持つ

宗教や哲学に造詣が深く

編集長として言論誌「RONZA」を創刊

論壇に新風を送りこんだ

現在は法政大学での「平和論」講座に熱を注ぐ

著作に『人間の音』、『巴里夢劇場』

『糖尿列島』など

剣道は教士七段

